

子ども甲状腺ガンが 117 人 子どもたちが危ない！

（もはやこの検討委員会では子どもたちの命と健康は守れない）

- (1) 今回（第 18 回）の子ども甲状腺検査の結果は、前回に続き、1 巡目の検査に加えて 2014 年春から続けられてきた 2 巡目の検査結果も併せて公表された。1 巡目の検査結果では、悪性ガンの患者数が更に増え、前回の 108 人から 109 人となり、うち 87 人が摘出手術を既に終えた。原発事故が放出した放射能への懸念は増すばかりである。
- (2) 一方、2 巡目の検査結果では、1 巡目検査において A1、A2 判定を受けて「問題ない」とされていた子どもたち 8 人に新たに甲状腺ガンが発見されるなど、深刻な事態が表面化した。1 巡目検査と 2 巡目検査の合計で子どもの甲状腺ガンは 117 人となる。従来、福島県民健康調査検討委員会は、甲状腺ガンが「多発である」こと自体を認めようとせず、「原発事故に伴う放射線被曝の影響は考えにくい」とする見解をとり続けてきたが、ここにきて、この説明が破たんの様相を呈し始めている。
- (3) これまで子どもの甲状腺ガンは 100 万人に数人程度の発症率だったのが、福島県ではわずか 30 万人程度を検査して、既に 117 人の子どもたちに甲状腺ガン（ほぼ確定の疑いを含む）が発見された。これが多発でなくて何なのか。また、チェルノブイリ原発事故時の子ども甲状腺ガンの発生状況や、甲状腺ガンの進行速度の遅さ、原発事故当初の被ばく線量などを理由に被ばく原因を否定しているが、いずれも科学的実証的な根拠に乏しい納得のいかない説明である（大人のガンと子どものガンは違うし、初期被ばく線量は国や県の妨害・不作為等のため、今となっては計測できず正確にはわからない）。
- (4) とりわけ甲状腺ガンの進行速度については、2 巡目の子どもたちの場合、わずか 2～3 年で 1 cm 前後～1.7 cm の甲状腺ガンが現れてきており、従来、子どもの被ばく甲状腺ガンについて言われてきた通り、ガンの進行速度は速く、かつ他臓器への転移や周辺部位への浸潤の度合いもひどい悪性のガンが多いということが明らかになりつつある。
- (5) 子ども甲状腺検査自体がお粗末、検査体制が脆弱（検査機関や検査医師が少ない、検査機器類が足りない・貧弱）、結果の本人への還元がきちんとなされない、血液検査や尿検査、心電図等の被ばくに対する総合的な検査がない、検査結果の保存期間があいまい、セカンド・オピニオンが取りにくい、情報が統制されている、被害者や医療機関の費用負担の問題等々、これまで指摘された多くの問題点が未だにほとんど改善されない。
- (6) また、福島県以外の放射能汚染地域の子どもの達や全汚染地域の 18 歳以上の住民については、（たくさんの要望が出されているにもかかわらず）放射線被曝に対する健康管理や調査・検査・治療の対策が全くなされない。

「原子力資料情報室」会員、ちょぼちょぼ市民による政策提言の会

田中一郎 (ichirouchan@withe.ne.jp)

(2015 年 3 月 17 日)